



全農教

日本帰化植物友の会通信



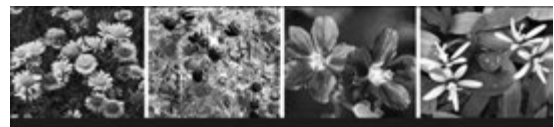
NO.8 [2011年3月1日 発行]

『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』発行

お待たせいたしました。『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』を平成22年12月初旬に発行いたしました。昨年2月発行の「全農教・日本帰化植物友の会通信」NO.7で、発行予定平成22年5月で友の会の皆様に予約限定特別割引で予約を募集いたしましたところ、多数の皆様からお申し込みをいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

当初は5月発行の予定で編集を進めておりましたが、帰化植物を収録する図鑑という目的上、次から次と新しい情報をお寄せいただき、どうせ刊行するからにはより多くの種を収録しようということになり、これらを取り入れておりましたら編集が遅れ、また、第1巻で種子の写真を入れましたら好評をいただきましたので、第2巻も種子を入れようということになり、こうした作業が重なったために発刊が大幅に遅れてしまいました。この間に皆様からは「まだか、まだか」と催促のお問い合わせをいただきました。ご迷惑をお掛けいたしました申し訳ありませんでした。遅れましたことを更めてお詫び申し上げます。

発刊後約2ヶ月を経過いたしました。この間にメールや愛読者カードでたくさんの声を寄せていただきました。今回の通信はこれらの声を特集させていただきました。



日本帰化植物写真図鑑

第2巻

— Plant invader 500種 —

〈編・著〉植村修二／藤山輝男／清水昭彦／水田光雄／森田弘彦／廣田伸七／池原直樹



『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』まえがき

2001年7月に『日本帰化植物写真図鑑』を刊行してから9年が経過し、2008年6月には第5刷を発行して現在に至っている。この間帰化植物に関わる問題はますます燃えさかる一方で、関係各位の尽力にもかかわらず沈静化の兆しはない。

帰化植物問題は、1990年代半ばから広く認識されてきた生物多様性の概念によってしっかりとその位置付けが明確になったと考えられる。いまや帰化植物という言葉よりも外来植物といった方がとおりがよくなった。生態系への影響を排除すべく外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関わる法律：2004年）が施行され、一定の歯止めがかけられようとしているが、その一方で侵入ルートも当初われわれが直面した輸入資材への混入だけでなく、花卉のエスケープなど多岐にわ

たることが判明してきた。その数も2009年現在で1,300種と増加している。

『日本帰化植物写真図鑑』は、帰化植物に関する情報交換を行う二つの全国的な組織を生み出したことで、これまでどの植物図鑑にも果たせなかった役割を発揮した。そのひとつは、出版元である全国農村教育協会が組織した「全農教・日本帰化植物友の会」で、約1,800人の登録会員を擁して会誌である「通信」による情報交換を行っている。他のひとつは、2002年1月に「友の会」とは別に発足した「帰化植物メーリングリスト」で、植物関係の専門家から愛好家まで多士済々の方々が管理者の元に電子メールを使った全国的なネットワークを形成してきた。現在までに4,600を超える帰化植物関連の情報をリアルタイムで交換し、データベースとして蓄積してき

た。すなわち、読者・出版社および編著者が、二つの組織体を通じて『日本帰化植物写真図鑑』の内容を総かりで補い、発展させてきたわけである。

二つの組織体の活動を通じて、未掲載の種のとりにまとめが必要、という声が多く寄せられるようになってきた。そこで、続編〈第2巻〉に掲載すべき種について「全農教・日本帰化植物友の会通信 NO.6 (2008年9月)」で掲載に適切な写真を募ったところ、105人の方から200余種の新しい帰化植物の写真が提供された。また、「三重県帰化植物誌」や「新版 三重県帰化植物誌」の著者である故太田久次氏の貴重な写真を、現在の所蔵者である三重県立博物館のご好意によりご提供いただいた。これらの写真と著者らの手持ちをあわせて500種近い写真が揃った。

第2巻の刊行に当たっては、第1巻の編著者3人に加え、上記の二つの組織体で中核的役割を果たしている植村修二・水田光雄・勝山輝男の諸氏と、沖縄県での帰化植物に詳しい池原直樹氏を加えて、収録範囲を拡大し、記載内容の正確度の向上をはかった。

〈第2巻〉は『日本帰化植物写真図鑑』に掲載できない

かった種とその後新たに報告された種、および地理的に特徴をもった沖縄県で見られる種など500余種の帰化植物を収録し、写真と解説を科ごとに配列し、あわせて種子の画像を含めた。前巻収録の600余種とあわせると約1,100種、類似の植物まで含めると約1,200種となり、この2巻で現在のわが国にある帰化植物のほぼすべてを網羅していると言えよう。本図鑑の利用者各位には、今までわからなかった帰化植物も「ああ、これか」と納得していただけるものと確信している。

本書の作成に当たっては、別掲(2頁)の多数の方々から貴重な写真や資料をご提供いただいた。ご協力に厚くお礼を申し上げます。また、本書の編集に当たっては全国農村教育協会の皆さん、特に元村廣司、田口千珠子、土崎知子、大野陽子の皆様には大変お世話いただいた。改めて御礼申し上げます。

読者各位には『日本帰化植物写真図鑑』のさらなる充実のために新しい情報をご提供くださるよう引き続きお願いしたい。

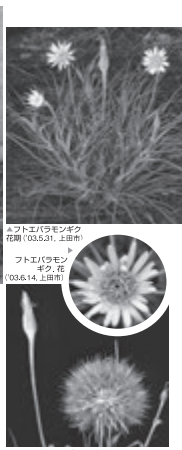
2010年11月 編・著者代表 清水矩宏



▲(特撮) 類似種のノタキキ (10.6.16, 玉手町)
▲(特撮) 類似種のイヌタキキ (10.6.16, 玉手町)
▲エフクレタキキ 花期(上) (03.6.18, 立川市) (04.9.4撮影)
エフクレタキキ 【タヌキキ科】
Crivalaria rotunda Walter
(E) swollen bladderwort
北アメリカ東部原産の多年生草本。葉は放射状に輪生し、葉は水中でよく分裂して、長さ2cm以上になる。植物体のまま越冬し、水中を浮遊し、広く分布する。春と秋の2回、4~9枚の葉が変形した芽生を放射状に輪生し、花茎を水上に伸ばす。葉茎は長さ1~20cmで、花冠は鮮黄色で、長さ1.5~2.5cm、



▲フトエ(フエモンギク) 成植物 (03.6.14, 上田市)
フトエ(フエモンギク) 【キク科】
Foeniculum vulgare Scop.
(E) yellow fennel
地中海沿岸の越年生草本。パラスモンギクに似るが頭花の柄は先に附かって着くようになる。頭花は黄色で直径約5cm。総苞は花冠より大きく、葉時に長さ3~5cmになり、総苞片は8~13個。そう葉は同形形で本体は長さ12~15mm、本体とはほぼ同色の柄があり、冠毛は線状で白色~淡緑色。パラスモンギクと同様に根を生用する。渡来年代は不明であるが、パラスモンギクと同様に食用または觀賞用に栽培され、ときに逸出することもある。パラスモンギクと混同されていたため、2003年になってその存在に気づかれた。日本の帰化植物として、p.125-5はフトエ(フエモンギク)と思われる。



▲フトエ(フエモンギク) 葉 (03.6.1, 松本市)
▲フトエ(フエモンギク) の葉の比較は293頁参照。
【文献】 521p.
【写真掲載】 撮影(松本市、上田市)で種化確認。多量が帰化(種化)写真集(3) : 2



▲インドシクンシ 成植物 (08.10.14, 沖縄市)
インドシクンシ 【シクンシ科】
Quisqualis indica L.
(E) Rangoon creeper
インド・マレーシア原産のつる性木本。インド・マレーシア原産のつる性木本。沖縄への渡来年代は不明。竹富島や西表島などの八重山諸島で逸出野生化したものが見られる。花は觀賞用に栽培は数種あるとして利用される。葉は線まのようにして伸び、長さ5~10cmになる。葉は1cmほどの葉柄があり互生する。枝、葉柄、葉背面、葉腋などに有毛。葉身は楕円形~長楕円形、長さ5~15cm、

▲ 第2巻に掲載した帰化植物。珍しいものが多く掲載してある。

— 読者からのお便り —

■楽しみにしていた『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』が届き、仕事そっちのけで読みたいところを、じっと我慢の東京のKです。パラパラとめくりながら、まだ見たことのない帰化植物の写真の数々を興味深く拝見し、また、たくさんのコラムを読めるのをこれから楽しみにしております。 [東京のKさん]

■『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』が昨日届きました。見始めるとやめられないですね(笑)。東京のKさんの気持ちがよくわかります。

特に今まで和名が与えられていなかったイオノプシジウム、ダールベルグデージー、サンヘンブにそれぞれにヒメムラサキハナナ、カラクサシュンギク、コヤシタヌキマメの和名が与えられていたり、この春はじめて見た

キヌイトツメクサや、一昨年横浜で見たフウリンユキアサガオが掲載されていたりと見れば見るほどはまりそうで、仕事が手につかなくなるかもしれません。

[千葉のOさん]

■出張から帰ってきたら、楽しみの『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』が届いていました。

5月末に神戸で見かけた272頁のセイタカハハコグサを見ながら、さらに、ハハコグサとの雑種っぽいのでアイセイタカハハコグサというのもあるんだと関心しました。

そしてパラパラしていたら、65頁で激震がはりました。トゲナガミゲシのお姿です。学名で見る限りナガミゲシとは種レベルで異なるようですが……。来春のお楽しみが見つかりました。

あと、沖縄編、パパイヤなど、植物園の大温室で見たようなものもチラチラ、あれ、440 頁にはトウネズモチ、今回は、樹木も少しですが取り上げているようです。

[広島の方 F さん]

■『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』を受け取りました。編集の皆様ご苦労様でした。次の文は今後の参考にして下さい。

(1) キダチタバコ……P. 205

この関東地方における分布状態が出ていませんが、私は関東で見えています。鎌倉市内のキリスト教教会の庭で、1992 年に見まして、このレポートを「フロラ・カナガワ No. 35 1993 年 3 月号」に載せてあります。

また、東京都小平市・東京都薬用植物園にも多数植えてあったのを見えています。

(2) キバナアマ……P. 409

沖縄の部にありましたが沖縄に限らず、神奈川、静岡の野外で多数見えています。X さんが 2004 年 1 月に静岡県伊豆半島のバス通り際にてご覧になり、この帰化 ML に書き込みがあり、私も 1 月 10 日に熱海の梅林の近くでみたのでレスをしてあります。また、逗子市神武寺への参道でも多くが野生状態で植えられています、ML へ報告済です。これらは、京都のタキ種苗が 1960 年頃に雲南月光花の名前で売り出したものです。これが全国に広まったようです。

(3) キミノバンジロウ……P. 420

これも沖縄に限らず、神奈川県でも各地で野外で育っています。一つの例ですが、横浜市金沢区杉田の小学校では校門のそばの植え込みにありました。毎年、冬も越しまして花を咲かせています。私も大型の植木鉢で栽培していますが毎年開花しても結実はしません。前項 (P. 419) のバンジロウとの相違は、糸状の花糸が平開する、葉脈は裏面に凸出しないことです。

オマケ……

沖縄の話題なら「アコウ」があっても良いかと思いました。逸出と考えているのでしょうか。三浦半島でも多

くの地点で野生状態で見ていたので、「日本の植物・No. 33 1987.9」にレポートしてありますし、逗子市にある逗子マリーナでも何本か大きい木があります。神奈川県植物誌 2001・P. 566 でも、“三浦半島の沿岸では常緑高木のアコウが防潮、防風用に人家の回りに植えられたことがある”と記載されています。〔神奈川の O さん〕

■9 月発刊予定ということでしたが、その後発表がなく当月にまでずれ込むとは思いませんでした。でも待った甲斐がありました。国内の帰化植物図鑑としては一番の最新・最多情報量図鑑と思います。これで一層植物観察に励むことができますし、大きな助けになることでしょう。ありがとうございました。〔愛知の H さん〕

■待望の『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』をこのお正月休みにじっくり目を通しました。

記載植物の数がこんなに多いとは思っていませんでした、その多くの植物が私にとっては初めて見るものでした。

ヨーロッパ観光旅行の友人写真の「アカツメグサに似ていた 2 種」は、どうやらビロードアカツメグサとハクモウアカツメグサみたいであり、フウセンツメグサの図鑑写真との照らし合わせも出来ました。

ほぼ全てが帰化植物であろうハワイ (オアフ島) の公園芝地に混ざる植物の写真は 259 頁のツルセンダングサであることも分かりました。

海外の道端や草地の野草を日本の帰化植物図鑑で調べるなんていう「逆さ調べ図鑑？」としても使えると期待出来ました。〔東京の U さん〕

■里山に多種の帰化植物が入りこんで久しくなります。それもどンドン“新種”が出てきて、同定に悩まされています。とどまることの知らぬ帰化植物ですが雑種の出来ることを恐れています。図鑑に雑種もつけて欲しいです。〔大阪の S さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑』は大変重宝しています。野草図鑑もたくさんもっていますが、帰化植物には全く役に立ちません。届いた『第2巻』を期待しています。

〔鳥取の Y さん〕

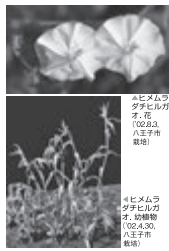


ヒメムラダチヒルガオ

[ヒルガオ科]

Comoloba pilosellifolia Des.

(E) south hindweed
地中海東部～中央アジア原産で、北アメリカにも帰化している多年生草本。葉は基部から生じ長さ 1m ほどになり、白色の長絨毛に覆われ、淡緑色を帯びる。葉の断面は円形で、中部の葉脈から枝を出す。葉は基部付近のもので長さ 7cm、幅 1mm、線状の針形で鋭頭、上部の葉は長さ 35mm、幅 7mm、卵状の針形、鋭尖頭、葉縁は波打ち葉縁はない。花は上部の葉腋から長さ 3cm ほどの柄を伸ばし先端に 1～5 花を着ける。花冠は杯形で、直径 1cm ほどで白色～緑付近が淡褐色を呈し、午前中開花している。オウは有毛で 3 裂、長さ 6mm ほどになる。花期は 6～8 月。わが国では、1994 年に兵庫県神戸市で確認されている。



ヒメムラダチヒルガオ
[ヒルガオ科]
Comoloba pilosellifolia Des.
(E) south hindweed
地中海東部～中央アジア原産で、北アメリカにも帰化している多年生草本。葉は基部から生じ長さ 1m ほどになり、白色の長絨毛に覆われ、淡緑色を帯びる。葉の断面は円形で、中部の葉脈から枝を出す。葉は基部付近のもので長さ 7cm、幅 1mm、線状の針形で鋭頭、上部の葉は長さ 35mm、幅 7mm、卵状の針形、鋭尖頭、葉縁は波打ち葉縁はない。花は上部の葉腋から長さ 3cm ほどの柄を伸ばし先端に 1～5 花を着ける。花冠は杯形で、直径 1cm ほどで白色～緑付近が淡褐色を呈し、午前中開花している。オウは有毛で 3 裂、長さ 6mm ほどになる。花期は 6～8 月。わが国では、1994 年に兵庫県神戸市で確認されている。

—イヌホオズキの見分け方— (静岡野別)

イヌホオズキ	オオイヌホオズキ	アメリカイヌホオズキ	オオイヌホオズキ	オオイヌホオズキ

イヌホオズキ
オオイヌホオズキ
アメリカイヌホオズキ
オオイヌホオズキ
オオイヌホオズキ



オウロコアザミ

[キク科]

Onopordium illyricum L.

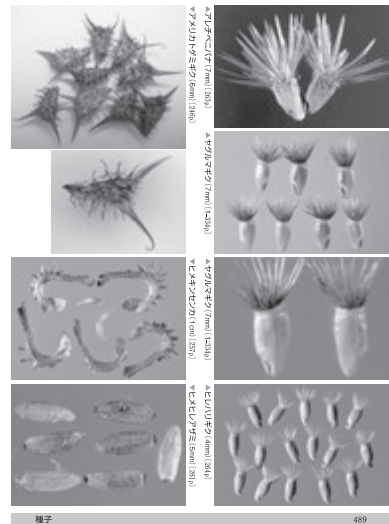
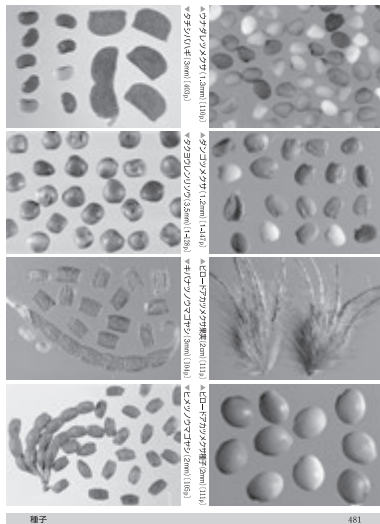
(E) Ilyrian cotton thistle; Ilyrian thistle

ヨーロッパ～西アジア原産で、北アメリカやオーストラリアなどにも帰化している二年生草本。全草、茎の葉状の白い綿毛に覆われ、灰白色を帯びる。葉は直立し、高さ 2m に達し、上部で分枝した枝も直立して長く伸ばし、全長にわたり幅 1cm ほどの軟(ひ)れがある。葉は互生し、楕円形で、時に羽状に浅裂し、長さ 10～50cm になる。茎

の後に葉縁には刺がある。夏、長く伸びた葉先に淡紫色のオウミの頭状花をつける。また短い側枝を出して数個集まって着ける。先に刺を持つ総苞片に包まれ、頭状花は直径 3～6cm で、総苞片は幅 5mm 以上、先端が明瞭に反曲する。三重根の紡錘土壌に開化した場所で見いだされている。

[図鑑] 521p
[分布地] 三重(大田次夫 1997 改訂 三重県帰化植物誌、ムツミ企画)

▲ 第2巻に掲載した帰化植物とコラム



▲第2巻に掲載した種子とコラム

■御社の編集姿勢に敬意を表しています。益々のご発展を!!
〔北海道の H さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑』(1巻2巻)は、日頃よく目にするものの、他の図鑑では調べられない植物の名前が分かり楽しんでいます。

『第2巻』のP.280のブタナに関する比較はとてもおもしろいと思います。我が家の庭の“ブタナ”は実は違うのかも、と思いました。春になったら調べてみます。

〔新潟の M さん〕

■すばらしい、完璧な図鑑です。覚えることが増えていくので大変!!
〔東京の T さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑』はとても参考になります。今後にも楽しみにしています。
〔兵庫の M さん〕

■やっと『第2巻』が刊行され、年内なので良かったと思いました。内容を見て、あまりに目にしたものが少ないのに驚かされ、これから出会えるのがとても楽しみです。勝山先生の「イヌホオズキの見分け方」の表は、とても役立つと思いました。
〔東京の H さん〕

■『第2巻』により、新しい帰化植物の名前が分かり、もやもやした気持ちが、すっきりしました。これからも図鑑を活用させていただきます。
〔兵庫の H さん〕

■『第1巻』に続き、帰化植物の情報を得る事が出来ました。早速、私の「加古川市内の野草」写真図鑑にツタノハルコウとチリーアヤメを加えました。
〔兵庫の N さん〕

■よい図鑑を刊行していただき、感謝であります。植物を勉強している者ですが、帰化植物はめまぐるしく動きなかなかその全貌がつかめません。今回の企画で現在までの帰化植物をまとめていただいて、嬉しく思います。
〔長野の N さん〕

■本年11月初旬、日田市刃連町の畑で(オオイヌホオズキ・イヌホオズキ)の実に似たナス科の植物、葉は普通のナスの葉に似ているものが見つかり、種名不明で困っていました。『第2巻』でセイバンナスどとわかり助かりました。
〔大分の S さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑 第2巻』を入手しました。ま

カミヤツツ

Tetrapanax papayifer (Hook.) K. Koch

(E) rice-paper tree; Chinese rice-paper plant

中国南部、台湾原産の常緑低木であるが、関東地方では寒さで傷んで落葉低木となり、場合によっては地上部が枯死し、翌年は根元から萌芽する。幹はほとんど分枝せず、高さ3-5mになる。葉は幹の上部に集まって着き、長さ70-100cmの巨大な掌状の葉を広げる。葉は数枚で数日、さらに長く残ることが多い。葉質は薄く、表面に光沢がない。若い葉や葉裏は綿毛で覆われる。11-12月に、幹の上部に、雄花の散形花序を複総状に着ける枝を伸ばし、黄緑白色の小さな5弁花を多数着ける。筆者はまだ実実が熟するのを見えていないが、鮮やかな地味黄緑色では、実実を開き、実を食べた鳥の糞で種がばら

まかれたり、)との報告がある(「オキヤツツ増殖中」毎日新聞2008.12.27)。若い幹の内側には発達スチロールのような白色の太い層があり、紙の原料とされる。産地では常緑で生育し、しばしば逸出しており、地下に伸びた根から新苗を作る性質がある場所によっては群生している。別名ツツク、ツツクダツク。

【文獻】野外図鑑(改訂版)山形県505種(杉本林学誌特355)

【分布】中国 平遥(財団法人千葉大学研究報告2003)

千葉県の自然誌 引鑑(千葉大学植物誌)

【採集】神奈川県(神奈川県立植物園)

【標本】神奈川県立植物園(2001)

神奈川県立植物園(2001)

神奈川県立植物園(2001)

神奈川県立植物園(2001)

神奈川県立植物園(2001)

神奈川県立植物園(2001)

神奈川県立植物園(2001)

だ、全部目を通していませんが、かねてからの疑問がかなり解決しそうです。沖縄編が嬉しいです。

〔埼玉の S さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑』『日本原色雑草図鑑』とも内容が大変すばらしいと感じます。また、良心的な作り方をしていると思います。
〔千葉の U さん〕

■野外を歩くと、思わず知らない雑草に出会い帰化植物と思いながら、これまでの帰化植物図鑑では同定できずにいた。全国農村教育協会から『第2巻』が発刊されたことで、直ちに購入することにした。
〔長崎の M さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑』の増補スパンを短くするか、いっそ年度版で増補をしていただくと、帰化植物の増加に、私のような専門家でないような者でもついていけるのですが……。
〔神奈川の I さん〕

■『日本帰化植物写真図鑑』の第1巻は、本当に感動的でした。近所の植物園で展示用に植えられている植物の中にも載っているものがあるし、とても参考になりました。帰化植物は正体のよくわからないものが多かったので、重宝しています。これからもよろしく願います。『第2巻』も発売日より前に入手!植物関係の知人にみせびらかしました。
〔兵庫の Y さん〕

■情報量の多い専門書である為に書籍の代金が高めになるのはわかりますが、同好会参加程度の高齢読者にとって割引販売があるのは非常に助かります。今後も是非続けていただきます様お願い申し上げます。
〔福岡の K さん〕

■去年は異常な暑さの為か、水田には今までで見た事のない雑草が目立ちました。図書館に調べに行き、その植物が載っている本が、『日本帰化植物写真図鑑』で帰化植物の多さに驚きました。調べていた植物は、ヒレタゴボウでした。あと、猛暑のせいかわかたオオナノミが水田の中心に、水の中に生えていたのには、驚きました。畦道などでは、みかけていたけど水の中に丈を伸ばして生えていたのは、今まで見た事がなかったの。

〔静岡の K さん〕

カヤツリグサ科 入門図鑑

谷城勝弘／著

定価 2,800 円＋税 A5 判変形 256 頁



識別困難といわれるカヤツリグサ科植物。その識別ポイントをやさしく解説した、画期的な図鑑。入門者にも使いやすい内容です。

(本書の構成)

第1部 カヤツリグサ科の形／第2部 カヤツリグサ科 200 種／第3部 カヤツリグサ科の生える環境／第4部 標本でみるカヤツリグサ科

書評から (抜粋)

人には「好きなんだけど、どうも苦手」「興味はあるんだが、近寄りがたい」というものが少なからずあるようだ。(中略) 植物では、イネ科とカヤツリグサ科がそれに当てはまるだろう。種類が多く、形がどれもよく似ていて、見分けに役立つような花など明確な情報が少ない。

だが、世の中には実直で優しい人がいるものだ。日本には約 600 種存在するというカヤツリグサ科の植物のうち、200 種を集めて『カヤツリグサ科入門図鑑』を作ってくれたのだ。そして、ここからが大事なことなのだが

「この科の植物の判別の決め手となる識別形質は限られており、その形質は種ごとに比較的安定して変異の少ないものであるから、慣れれば誰にでも容易に種類の見当がつけられる」と勇気づけてくれている。これが嬉しい。

では、その識別に役立つ形質は何かというと、葉の形や花序の様子ではなく、雌花(後には果実となる)を包む果胞とよばれるものや、雄花や雌花に付属している鱗片や、果実そのものの形なのだという。

現金なもので、このように順序だてて丁寧に説明を受けることができると、何も味気なかったカヤツリグサ類の顔が急に親しげに見えてくる。

(BE-PAL 2007 年 8 月号掲載 文・三宅直人)

まず、手にとって驚いたのは写真が鮮明で、小さくて虫めがね(ルーペ)で見てもよく分からない小穂(しょうすい)を拡大写真で載せ、分類の決め手を矢印で示してある。

著者の言葉を借りれば、初心者でも使いこなせる一目瞭然の写真図鑑だ。レンズを何枚も組み合わせて、著者が工夫し撮影した写真で、しかも生の植物からとったものだから、実際と少しも変わらない。カヤツリグサを右手に、この図鑑を参照すれば植物の名が分かるようにした著者の心配りが随所にうかがえる。ハンディーな図鑑だから持ちやすく、重さも手ごろで、表紙も雨に濡れても大丈夫なようになっている。

(千葉日報 2007 年 4 月 16 日掲載 文・川名興)

シダ植物

村田威夫・谷城勝弘／著

定価 1,905 円＋税 A5 判 136 頁



花が咲かないためわかりにくい植物と思われていたシダ植物。その形と生態をわかりやすく写真を交えながら解説しました。図鑑編ではワラビ、ゼンマイ、スギナをはじめとして、身近にみられる 90 種を紹介。入門に最適な図鑑です。

(本書の構成)

第1部 シダの「くらし」と「かたち」／第2部 身近なシダ 90 種／第3部 シダを調べる

書評から (抜粋)

シダ類は、素人なりに本気で取り組もうとすると想像以上に手強い。そこで形に特徴のあるものからでも覚えようかということになるのだが、それではいつまでたっても身近な種の区別がつくようにならない。かといって、体系的に取り組もうとすると、用語なども含めてなかなか敷居が高いのだ。

そうした中で、あるシダ観察会に参加したら、目からウロコが落ちた。「やはり身近なものから始めるといいですよ。それには場所が重要」と言われたのだ。(中略)

本を開くとまず校庭、学校周辺、都市の公園、日本庭園、崖地といった場所で見られる主だったシダが列挙されている。これがいい。なぜか?

これによってどの種から覚えていったらいいかが何となくわかってくるからだ。たとえば学校周辺なら古い石垣に生えるイノモトソウ、溝の上のミゾシダ、都市の公園ならツツジの植え込みの間などに見られるベニシダ、遊歩道沿いのオニヤブソテツといった具合に。

考えてみると、虫にしる魚にしる子供の時から親しんできたものには、知らず知らずのうちに自分の中に身近度ランキングができていく。(中略) 先の観察会や本書は、場所を限定することで種を絞り、さらにその場所によく見られるものを選び出すことで、私たちの中に身近度ランキングを形作ってくれる。これにより次のステップに自信をもって進めるようになるのだ。

そして、本書のもうひとつの特徴は、全 136 頁のうち前半の 46 頁、後半の 36 頁(全体の約半分以上!)がシダの見方にあてられていることだろう。後半は雑種の話などでやや高度だが、前半部では先に述べた生育場所の話のほか、進化や分類、生活史、繁殖、形態など基礎的な話をたくさんの写真を使って丁寧に解説。生物の教科書にも、これくらいの解説がついていれば興味を持つ人が増えるだろうと思わせるほどだ。

(BE-PAL 2006 年 10 月号掲載 文・三宅直人)

せいかつけい
植物の生活型の話

— 雑草のくらし

・ 野外観察入門 —

岩瀬 徹／著

定価 1,500 円＋税 A5 判 120 頁



「生活型」とは植物の形やくらしぶりを類型化したもの。生活型の視点でみた雑草のくらし、野外観察のヒント、植物生態図鑑の読み解き方をを解説しました。

(本書の構成)

1 章 植物の生活型とは何だろう／2 章 生活型のいろいろ／3 章 植物生態図に示された生活型／4 章 生活型から見た雑草のくらし

書評から (抜粋)

「生活型」とは、一般になじみが薄いですが、岩瀬氏の新書は身近な植物を例にしながら、人々に分かりやすい植物観察入門となっている。類書がほとんど見られないから植物愛好家はもちろん、読者にとっても必見の書物だ。

(中略)

自然観察大学で学長を務める岩瀬氏はこの本の主旨を生かして指導も怠りない。例えばクマノミズキの木でいうと、枝の伸び方を説明した後、葉のつき方や芽の様子を観察指導する。世の観察会ではえてして“この木は何

ですか”ときかれると“クマノミズキです”。これで指導者と会員の会話は終了。名前を知ればそれでおしまい。これでは木をよく観察しない。まして芽が鱗芽なのか裸芽なのか、葉は対生なのか互生なのか、木のくらしや形を見ないままクマノミズキの名前を知るだけになる。観察をもっと深めるための目線をこの本によって知ることができよう。

(千葉日報 2007 年 1 月 22 日掲載 文・川名興)

題名はチョイ難に聞こえるが、本書は平たくいえば「植物を見ると、その生活ぶりに注目するとおもしろいよ」という本だ。

たとえばよくご存知のナズナ(アブラナ科)やオオアレチノギク(キク科)、メマツヨイグサ(アカバナ科)は類縁関係は遠いが、いずれも冬越しをするとき地面にへばりつき放射状に葉を出すロゼットという形をとる。そこで逆にロゼットになる植物だけをながめてみると、それらが日当たりのよい場所、人間に踏みつけられる場所などに多く見られることがわかる。つまり生活型からおおよその環境が推定できたりするからだ。(中略)

そこには人間の勝手な分類などどこ吹く風で、したかに生きる植物の姿が浮かび上がる。一見物静かな雑草が、自分だけの生き方にこだわる個性派だということが実感としてわかるのだ。一步進んだ植物観察をしたい人にぜひお勧めしたい。

(BE-PAL 2007 年 2 月号掲載 文・三宅直人)

浅野貞夫日本植物生態図鑑

浅野貞夫／著

定価 13,000 円＋税 A4 判 636 頁 (カラー 36 頁)

本書を本会会員に限り、定価 13,650 円(税込み)を特別価格 12,000 円(税・送料込み)で頒布します(本会直接申込に限る)。

植物の一生の姿を記録した、世界にも類をみない「生態図鑑」。著者浅野貞夫は、植物の一生を追跡しながら克明な生態図を描き 40 有余年をかけて 555 種類の植物生態図を完成させました。植物の全形から地下部、芽ばえ、花、果実、休眠芽までを描写。特に地下部の精密さは圧巻です。植物の生育、繁殖、休眠などで生活様式を類型化した「生活型」を全パターン表現しています。巻末に全掲載種のカラー写真を掲載しました。

書評から (抜粋)

世に植物図鑑はあるが、発芽から種子が落ちるまで、植物の一生の姿を記録した「生態図鑑」はみあたらない。そんな図鑑がたった一人の高校教師が 40 年以上の歳月をかけて残した 555 種類のスケッチ画をもとに完成した。(中略) 転機となったのは 53 年、千葉大学の沼田真

との出会いだった。千葉県生物学会の代表であった沼田は、生物の生活と環境のかかわりを調べる生態学者。浅野は研究を通じて沼田と知り合い、その生態学の「生活型」という視点に示唆を受けた。以降、地下器官の動態、芽ばえの姿など、種によって異なる生活型を追求し、精密な図に表すようになった。

その性格は植物のスケッチにも表れている。例えばキク科のネコノシタなど、花を付けた全形はもちろん、花や果実の様々な形、芽生えの葉の成り方、果実の断面、枝分かれた茎の一本一本、葉の表面の毛まで、細部にわたり観察し、それらを 1 枚の紙にきっちり収めて描いている。

とりわけ他の図鑑の追従を許さないのは、地下部の姿だろう。地表の位置が横線で記され、それより下の根がどういう姿で、どの方向に伸び、これから地上に出る休眠芽がどの位置にあるのかなど、土を掘り起こして観察した様子が手に取るようにわかる。ヤマハッカ、アキカラマツ、ミクリなど、妥協を許さない筆致で描いた根の一本一本の描写は圧巻だ。(中略)

改めて眺めても、その図のすごさには目を見はる。高校教員を定年退職後も私は野外での植物観察を続けているが、ときどき細かい発見をして喜び家に帰ってこの図鑑を開くと、すでに浅野が何十年も前に記録しているのだ。(日本経済新聞 2006 年 1 月 24 日掲載 文・岩瀬徹)

形とくらしの雑草図鑑

— 見分ける、身近な 280 種 —

岩瀬 徹／著 定価 2,400 円＋税 A5 判 223 頁

「わかりやすさ」を第一に考えて編集しました。文字による説明をできるだけ少なくし、写真をできるだけ多く使って、目から理解できる…特にビギナーのかたにもおすすめできる雑草図鑑です。

「科」の構成も画期的です。科の特徴もまた、文字を少なく、写真を多用して表現しています。科というグループを理解することで、雑草の見分けがいきそう楽になります。

【収録種】

トクサ科 3 種、クワ科 2 種、タデ科 14 種、ベンケイソウ科 2 種、ナデシコ科 9 種、スベリヒユ科 1 種、ヤマゴボウ科 1 種、アカザ科 5 種、ヒユ科 7 種、アブラナ科 16 種、ケシ科 2 種、ドクダミ科 1 種、バラ科 2 種、マメ科 20 種、フウロソウ科 1 種、ブドウ科 1 種、トウダイグサ科 6 種、カタバミ科 5 種、アカバナ科 6 種、ウリ科 2 種、セリ科 4 種、アカネ科 5 種、サクラソウ科 2 種、ガガイモ科 1 種、ヒルガオ科 7 種、シソ科 4 種、ゴマノハグサ

科 7 種、ナス科 3 種、オオバコ科 4 種、ムラサキ科 2 種、キツネノマゴ科 1 種、オミナエシ科 1 種、キキョウ科 2 種、キク科 63 種、ユリ科 2 種、ヒガンバナ科 1 種、アヤメ科 3 種、ツユクサ科 3 種、イグサ科 2 種、イネ科 48 種、カヤツリグサ科 4 種、ラン科 1 種／計 276 種。



書評から

「雑草の形を見る、くらしを考える、そして名前に近づく」という、著者の長年のテーマを表現した、渾身の本格雑草図鑑です。身近な雑草約 280 種について、さまざまな角度からカメラが迫りました。コンパクトながら 1,300 余点という圧倒的な写真点数です。初めての方から植物マニアまでおすすめ！

(愛媛新聞 2007 年 11 月 8 日掲載)

名前がわかる

和名の意味や語源の記載があるので覚えやすく、理解が深くなります。

簡潔な解説

詳しい形態などは写真にゆずり、簡潔な解説としました。



はじめての方へ

植物専門用語などを使わずに写真で表現しているため、はじめての人に最適です。

愛好家の方へ

観察のポイントなど植物としての形の妙が満載で、植物愛好家の方々にも新鮮な驚きがあるはずです。

桑原義晴日本イネ科植物図譜

桑原義晴／著

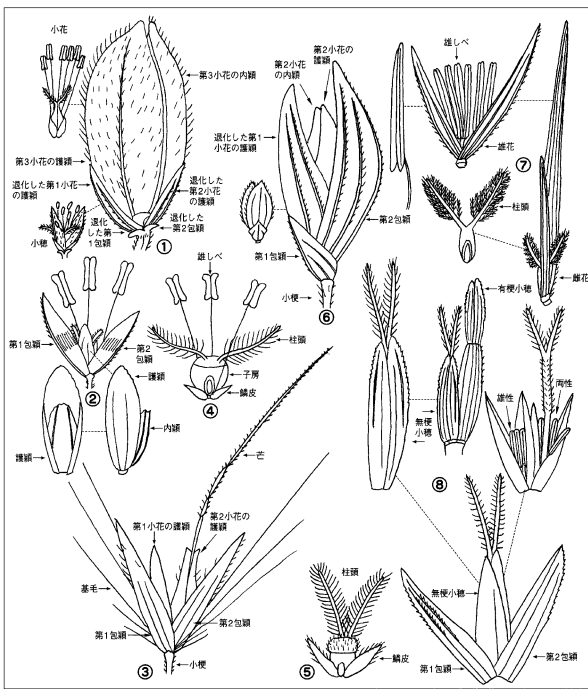
定価 6,800 円＋税 B5 判 504 頁 カラー 24 頁

本書は定価 7,140 円 (税込み) を本会会員には、特別価格 6,000 円 (税・送料込み) で頒布します (本会直接申込に限る)。

イネ科植物は、人類の食糧資源をはじめ、家畜の飼料、庭園・公園の芝ふ、道路・堤防の補強用などとして多く利用され、人間との関係はきわめて深い。その上、熱帯から温帯にかけて広く分布し、種類も量も非常に豊富で、いたる所に見られる草本性の植物である。

しかし、どれもこれも同じような特徴をもっていて、しかも全体の形や花穂も同じように見えて識別が極めて困難な植物の一群である。

従ってイネ科植物はとかく敬遠されがちであるが、判別のポイントが分かると面白い植物群である。イネ科植物の判別のポイントは小穂を構成するいろいろな形の包葉 (包穎、護穎、内穎など) であるが、この図鑑では属ごとに数種を並べて比較した判別のための比較図をふんだんに使ったところに特色がある。例えば右下の図はキンエノコロ、ムラサキエノコロ、エノコログサ、アキノエノコログサの茎と花穂、小穂、葉舌、幼苗を比較したもの。左下の図はイネ科の各部位の用語を解説したものである。このように難しいといわれていたイネ科も拡大図で解説すると面白くなりイネ科もよく分かる図鑑である。

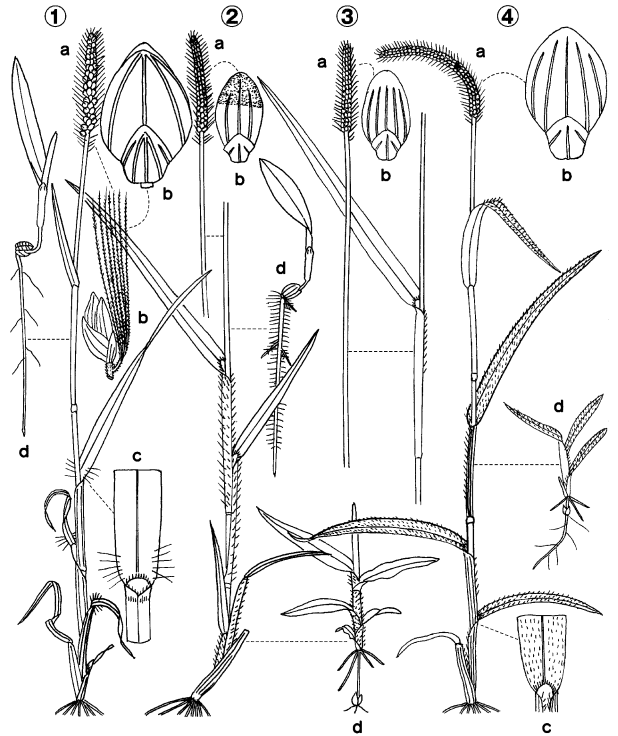


イネ科植物の小穂と小花の形態

小穂はイネ科植物に普通に見られる花序で、複花序の最終の枝の穂状花序をさす。小穂をついている花序の枝を小穂といふ。1個の小穂は2枚の包穎と、いくつかの小花及び小花をつないでいる軸 (小軸) からなっている。小花は種によって、1個の小穂にひとつしか含まれていないものから数個から多いものでは30前後も含まれているものもある。1個の小花は通常護穎、内穎各1枚、2枚の鱗皮、3本の雄しべ、1個の雌しべをもっている。

1. イネ (348)：小穂は3小花。包穎及び第1-第2小花は輪軸に退化し、第3小花だけが完全。第1、第2包穎は退化包穎。第1、第2小花の護穎は退化した護穎。2. コヌカグサ (44)：小穂は1小花。3. ススキ (325)：小穂は2小花。第1小花は退化して (不完全) 護穎だけとなる。第2小花は完全で護穎の先に芒がある。内穎は微小。4. ヒロハノウシノケグサ (238)：小穂は多小花。5. テンキグサ (211)：小穂は3-5小花。6. ヒメタイヌビエ (200)：小穂は2小花。第1小花は不完全。第2小花は完全。7. マコモ (478)：小穂は単生。3小花。包穎及び退化護穎は消失。第3小花は完全。8. アイアン (373)：無梗小穂は2小花。1個は雄性、他は雌性。有梗小穂は退化。

※和名の後の()内数字は図版の頁を示す。



エノコログサ属 (I) (イネ科)

2. ムラサキエノコロ *S. viridis* var. *viridis* forma *purpurascens* 葉は紫色。無毛。葉鞘は紫かっ色。有毛。小穂は長さ2mm。芒は紫色。(p.450)

3. エノコログサ *S. viridis* 葉は無毛。小穂は長さ2mm。芒は黄緑色。(p.444)

4. アキノエノコログサ *S. faberi* 葉の表面有毛。小穂は長さ2.8-3mm。芒は花序の枝に残りそのまま脱落する。1. キンエノコロ *S. glauca* 葉は基部にだけ長毛がある。小穂は長さ3-3.5mm。芒は黄金色。(p.439)

Setaria
 耕地に生育する1年草。葉舌は退化して毛状に変わる。小穂は2小花からなり、第1小花は不完全。花序の小枝の先はざらざらした芒に退化する。芒は剛毛状で、小穂の基部に発生する。小穂は、芒も花序の枝に残りそのまま脱落する。

● 友の会会員の特典について

日本帰化植物友の会の会員の方には、全国農村教育協会発行の図書については、本体価格の1割引でお送りいたします。全国農村教育協会の図書でご希望のものがございましたら、FAXまたは郵送で注文して下さい (会員番号は宛名シールの下に記入してあります)。
 ※なお、この特典は書店を通じての注文には適用されませんので、必ず直接申し込んで下さい (送料はかかりません。代金は請求書、振替用紙を同封しますから、現品到着後にお支払い下さい)。

**全農教・日本帰化植物
友の会事務局**

〒110-0016 東京都台東区台東 1-26-6
(植調会館) 全国農村教育協会内

代表 TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665
事務担当 TEL 03-3839-9160

http://www.zennokyo.co.jp
e-mail: kika@zennokyo.co.jp